

ご かん
後漢・153年

(教科書 22～25 ページ)



概要・特徴

153 (永興元) 年に建てられた隷書碑で、**八分隸**の代表的古典である。

中国・魯国(現在の山東省)の大臣であった乙瑛が、孔子の子孫にあたる孔麟から孔子廟(儒教の開祖である孔子を祀った建物)の保護・整備の相談を受けたことをきっかけに、卒史(役人)を常置して孔子廟を守らせるよう申請し、許可された。その経緯を記し、関係者の功績をたたえる内容が、四つの段に分けて記されている。当時の**上奏文**(天子に意見を申し上げるための文書)の形式そのままに刻されており、文献としても貴重とされる。碑には題額がなく、さまざまな呼称があるが、現在は「乙瑛碑」で通行している。

石碑は、山東省曲阜市の孔子廟内に建てられ、現在は廟内の漢魏碑刻陳列館に保存されている。高さは260センチメートル、幅は129センチメートルで、18行にわたって766文字が記されている。

隷書の中でも、横画の収筆に**波磔**(横画や右払いに見られる波打つような収筆)を備えた「**八分**」で書かれており、力強く堂々とした風格がある。起筆は**蔵鋒**。横画は水平で、おおむね扁平な字形である。背勢の字形が多く、引き締まった緊張感を感じさせる。

隷書の成立・時代背景

秦の始皇帝による中国の統一後、**小篆**が公式書体として制定された。いっぽう、日常の記録には、篆書を簡略化し、実用的にした隷書が用いられるようになった。漢代になると中央集権が進み、地方との公文書のやりとりに漢字が使われるようになったことで点画の省略・直線化が進む。秦代に小篆と併用された初期の隷書を「**秦隸**」、前漢から新代にかけての、波磔を強調せず素朴な味わいがある隷書を「**古隸**」とよぶことが多い。

前漢時代の前期には、既に波磔を備えた隷書が存在した。後期には華麗な波磔をもつ**八分様式**が生まれ、小篆に代わる公式書体となった。「乙瑛碑」が建てられた後漢時代の後期の石刻には、八分様式が広く用いられて最盛期を迎え、隷書の典型となった。